

9課

5月28日

押しのける者ヤコブ



安息日午後 5月21日

暗唱聖句

エサウは叫んだ。「彼をヤコブとは、よくも名付けたものだ。これで二度も、わたしの足を引っ張り（アーカブ）欺いた。あのときはわたしの長子の権利を奪い、今度はわたしの祝福を奪ってしまった。」エサウは続けて言った。「お父さんは、わたしのために祝福を残しておいてくれなかったのですか。」（創世記 27：36、新共同訳）

エサウは言った、「よくもヤコブと名づけたものだ。彼は二度までもわたしをおしのけた。さきには、わたしの長子の特権を奪い、こんどはわたしの祝福を奪った」。また言った、「あなたはわたしのために祝福を残しておかれませんでしたか」。 （創世記 27：36、口語訳）

今週の聖句

創世記 25：21～34、創世記 28：10～22、創世記 11：1～9、創世記 29：1～30、
創世記 30：25～32

今週のテーマ

私たちは引き続き、奇跡の子であり、約束の子孫の初期の祖先であるイサクの家族の歴史をひも解いていきます。しかしながら、この物語の始まりは好ましいものではありません。彼の息子ヤコブは性格に欠点があり、兄との間で長子の権利をめぐる競争心を露わにします（創25：27～34）。そして結果的に、その権利を父イサクから手に入れます（同27章）。

ヤコブは父をだまして兄から祝福を盗んだので、生涯、逃亡者として生きることになります。その逃亡中に、神は彼にベテルで対峙されます（創28：10～22）。その時以来、欺く者ヤコブは、自分自身が欺かれる経験をするようになります。彼が愛したラケルの代わりに（同29章）、姉のレアが彼に与えられ、彼は2人の妻のために合計14年間働くことになります。

しかし、ヤコブは同時に神の祝福も経験します。彼は逃亡中に12人の息子を得、神は彼の富を増し加えられます。

こうして、私たちはこの物語の中に、神はどんなことがあろうとも、神の民がどんなに失敗しようとも、一つの方法がだめでも別の方法によってその契約の約束を成就されるのを見るのです。

問1 創世記25:21～34を読んでください。ヤコブとエサウの2人の性格を比べてください。ヤコブのどんな資質をもって、後にイサクの祝福を受けるにふさわしい者であると言えるでしょうか。

すでに母親の胎内にある時から、ヤコブとエサウは違って、やがて互いに争うことになるのを私たちは知っています。エサウが野原を駆ける強靱な狩人として描かれているのに対し、ヤコブは天幕の中に座り、瞑想する「穏やかな」人のように見えます。この「穏やかな」と訳されているヘブライ語の「タム」と同じ形容詞がヨブやノアにも用いられており、ヨブの場合は「無垢」と訳され(ヨブ1:8)、ノアの場合は「全き」と訳されています(創6:9、口語訳)。

この性格の違いは、彼らの後の人生においてさらに明らかになります(創27:1～28:5)。エサウが疲れ、空腹で家に帰ると、ヤコブは豆を煮ていました。エサウにとっては、「今日」(25:31、英語新欽定訳)の食欲を満たすことのほうが、長子の特権に伴う未来の祝福よりも重要でした(ヘブ12:16、17と比較)。

「まずアブラハムに与えられ、そして、そのむすこに確証が与えられた約束は、イサクとリベカの心の大きな願いであり希望であった。エサウとヤコブは、その約束をよく知っていた。彼らは、長子の特権を非常に重要なものと考えるように教えられていた。というのは、それが、ただ単にこの地上の富の相続だけでなく、霊的に優位が与えられることをも含んでいたからである。それを受ける者は、家族の祭司となり、その子孫からこの世界の贖い主が出るようになっていた」(『希望への光』88ページ、『人類のあけぼの』上巻190ページ)。

兄とは違って、ヤコブにとっては、未来の霊的な祝福が重要な意味を持っていました。しかし後に、母にそそのかされたとはいえ(創27章参照)、ヤコブはあからさまに、故意に、「あなたの神、主」(同27:20)の名を用いてまで父を欺きます。彼は、自分が良いと思うもの〔長子の特権〕のためであったとはいえ、欺きという恐ろしい罪を犯します。

その結果は悲惨なものであり、すでに機能不全に陥っていたこの家族に、いくつものまったく新しい機能不全の種をまくことになります。

ヤコブは良いもの、価値あるものを望みました。それは(特に彼の兄のふるまいと比べると)称賛に値します。しかし、彼はそれを手に入れるために欺きを用い、嘘をつきました。私たちはどうすれば、誤った手段という同じ罠に陥ることなく「良いもの」を得ることができるでしょうか。

エサウはヤコブが父の祝福を受けてしまったと知るやいなや、弟によって欺かれ、押しのけられたのだと悟ります（創27：36、口語訳）。彼はヤコブを殺す決心をします（同27：42）。リベカはこの状況を案じ、息子が2人とも死ぬようなことだけは避けねばならないと考えます（同27：45）。そこで、イサクも納得の上で（同28：5）、彼女はヤコブをこの家族から逃れるよう説得します（同27：43）。この逃亡の途中、ヤコブは夢の中で神に会います。彼はその場所をベテル、すなわち「神の家」と呼び、主に誓願を立てたのです。

問2 創世記 28：10～22 を読み、同 11：1～9 と比べてください。私たちはベテルでのヤコブの経験とバベルで起きたこととの違いから、私たちの神との関係についてどんな教訓を得ることができるでしょうか。

この夢の中でヤコブは、神へとつながる驚くべきはしごを見ます。この情景を描写する、「はしごが地の上に立っていて」（創28：12、口語訳）と、「主は彼のそばに立って言われた」（同28：13）との記述の「立って」は、同じヘブライ語「ナーツァブ」であり、はしごと主は同じものであるかのように記されています。

このはしごは、天に届かせるために建てられたバベルの塔とつながります。このはしごはバベルの塔のように、「天の門」に届いています。バベルの塔が神に届こうとする人間の努力を表すのに対して、ベテルのはしごは、神に近づくことは、神が私たちのところに〔降りて〕おいでになることによってのみ達成できるのであって、人間の努力によらないことが強調されています。

ヤコブが頭を置いて夢を見た「石」は、「神の家」ベテルのシンボルであり（創28：17、同28：22と比較）、宮、聖所、すなわち神が人間を救われる活動の中心を指し示しています。

しかし、ヤコブは彼に起きた出来事を、霊的で神秘的な礼拝と畏敬の念に限定してはいません。彼は具体的に、目に見える形でそれに応えたいと望みます。こうしてヤコブは、神に「十分の一」を献げる決心をします。それは神の祝福を得るためではなく、彼にすでに受けていた神の賜物に対する感謝の応答でした。ここに私たちは、イスラエル国家が起こるはるか以前に、什一の思想があったことを見るのです。

創世記 28：11 を再度読んでください。この「什一」は「あなたがくださるすべての物」から取り分けられています（同 28：22、口語訳）。このヤコブが言った什一についての言葉から、私たちはどんな重要なことを学べますか。

問3 創世記 29：1～30 を読んでください。神はなぜラバンの欺きを許されたのでしょうか。ヤコブはどんな教訓を学んだのでしょうか。

ヤコブが目的の地に着いて最初に見たものは石でした。それはおそらく、ベテルの石を思い出させ、神の臨在を示すものであったと考えられます（創28：18、19）。この石が結局、ヤコブにラケルと出会うチャンスを与えることになります。ヤコブは、そこでいつも羊に水を飲ませている羊飼いたちから、ラケルがまもなく彼女の羊に水を飲ませに来ると聞きます。彼は羊飼いたちに石を転がして、羊たちに水を飲ませるように勧めますが、彼らはそれを断ります。それが幸いして、ヤコブが1人で石を転がすチャンスを得、同時に自分をラケルに紹介するチャンスを得ることになります（同29：11）。

ラケルは急いで家族のもとに走り、ヤコブに会ったことを報告します。ヤコブとラケルのこの最初の出会いが、「ヤコブはラケルを愛していたので」（創29：18）、「ラケルのために七年間働いたが……、それはほんの数日のように思われた」（創29：20）との、この物語の展開を生みます。

しかしながら、この7年の後、ヤコブは欺かれます。婚礼の夜、ヤコブが床を共にしたのは、ラケルではなく、姉のレアでした。それは、婚礼の宴の混乱の中でヤコブの情熱と無防備さに付け込んで、ラバンが仕組んだ策略でした。興味深いことに、父と兄に対してヤコブが取った行動の特徴を表すために父イサクが用いた「策略」（創27：35）という言葉と、この時にヤコブが使った「だます」（同29：25）という言葉の語根は同じです。

同じ考え方が、「目には目、歯には歯」という「復讐法」（出21：24を創9：6と比較）の中にも暗示されています。それは、加害者である罪人に、被害者が受けたのと同等の行為を〔罰として〕受けさせるという法則です。この法則のように、ヤコブがかつて他者にしたことを、今彼の身に受けるのでした。

ヤコブは今、だまされるということがどんなことかを身をもって知ります。皮肉なことに、神はヤコブに、彼自身の欺きがどんなものであったかをラバンの欺きを通して教えます。「欺く者」（創27：12、口語訳）であったヤコブが、欺きの被害者となって初めて、欺きがどのようなものであるかを思い知るのです。こうして彼は〔ラバンに〕尋ねます。「なぜ、わたしをだましたのですか」（同29：25）。その言葉は、彼が、欺きが誤りであることを知ったことを表しています。

ヤコブは欺く者でしたが、自身が欺かれます。私たちはどうすれば、「正義」が行われず、悪を行う者たちがのさばり、罪のない者たちが苦しむのを見てもなお神に信頼することを学ぶことができるでしょうか。

家を追われたヤコブの最後の7年は重荷でしたが、同時に最も実りの多い年月でもありました。ヤコブはこの期間に神の民となる12人の子どもたちの内の11人の父となります。

この部分は、ヤコブの物語（創25：19～35：26）の中心を成すものであり、神は「胎を開かれた」というキーフレーズで始まり、そして、終わります。レアについても（同29：31）、ラケルについても（同30：22）そうでした。毎回、この言葉に続いて出産があるのは、それらの出産が神の奇跡の結果であることの証拠となるためでした。

問4 創世記 29：31～30：22 を読んでください。これらの出来事の意味を、今日私たちはどのように理解すべきでしょうか。

神はレアの胎を開き、「顧みる」（ラア）という意味の動詞を含む名の息子ルベンを生みます。それはヤコブに愛されなかった彼女を神が「顧みて」くださったからでした（創29：31、32）。この子はレアの痛みと苦しみを和らげました。

加えて、彼女は二番目に生まれた息子に、「聞かれる（耳にされる）」（シヤマ）という意味の動詞を含むシメオンという名を付けます。それは、彼女の見下された深い痛みを神が「聞かれ」たからでした。こうして神は、ちょうどハガルの悲嘆を聞かれたのと同じように彼女に憐れみます（創29：33）。

レアの息子「シメオン」はハガルの息子「イシュマエル」と共通の「主は……お聞きになる」という意味を持っています（創16：11）。レアは最後の息子を産んで、「ほめたたえる」という意味のユダと名づけます。レアはもはや彼女の痛みや祝福さえも口にしません。彼女はただ、神に心を向け、その恵みを賛美します。

不思議なことに、神がラケルも「御心に留め」、彼女の胎を開かれたとき（創30：22）、レアの胎は再び閉ざされます。愛された妻であるラケルは、最初の息子を持つまでに、ヤコブとの結婚から7年、婚約から数えて実に14年待たねばなりません（同29：18、27を同30：25と比較）。彼女はその息子にヨセフと名づけます。それは、「神がわたしの恥をすすいで〔取り去って〕（アサフ）くださった」こと、そして「もう一人男の子を加えてくださいますように（ヨセフ）」（同30：23、24）との願いが聞かれたことを意味しました。彼女たちの行為にどれほど過ちがあったとしても、彼女たちを責めることもせずに、神はなおもそれらの行為を用いて目的を達することがおできになるのです。

この物語は、人間の欠点や過ちにもかかわらず、神の目的は天地において成就することをどのように示していますか。

この物語の中で、長子の特権を手に入れるために父と兄を欺き、イサクが彼の兄に与えようとしていた祝福を盗んだヤコブは、依然としてラバンの言いなりになって彼に忠実に仕えます。ヤコブは彼のしゅうとからだまされたことは十分承知していましたが、それをそのままにしていました。ヤコブの気性からして、このような彼の態度は理解に苦しむことです。ヤコブは反乱を起こすことも、少なくともラバンに逆らうことや、彼と交渉することはできたはずですが。しかし彼はそうしませんでした。彼は、ラバンの要求がどんなに不当なものであっても、すべてそれらを受け入れます。

しかしながら、ラケルの最初の息子ヨセフが生まれ、ヤコブのラバンへの「奉公」が遂に14年に達したとき（創30：26）、彼は約束の地へ帰るためにラバンのもとを去ることを初めて考えます。しかし彼の実際の関心は、「自分の家」（同30：30）を持つことでした。

問5 創世記 30：25～32 を読んでください。何が起きましたか。ヤコブは解決のためにどんな提案をしましたか。ラバンの反応はどうでしたか。

もともと、妻を見つけるために家を出たヤコブは、ずいぶん回り道をしたものです。おそらくこんなに長く故郷を離れるつもりはなかったでしょう。しかしさまざまな出来事が、彼を何年も引き留めることになりました。そして遂に故郷に帰る時が来ます。そしてそれは、なんと彼の家族を伴っての帰郷でした。

それにしても、ヤコブはなぜもっと早くラバンのもとを離れなかったのでしょうか。彼の尋常でない忠誠は、ヤコブが変わったことを示しています。彼は信仰の教訓を学んだのでした。それは、ヤコブが神の行けとのしるしを待ったことからわかります。神が彼に語ったとき、初めて彼は行動を起こす決心をします。

神はご自身を「ベテルの神」として現され、ヤコブにラバンの家を出て、「あなたの故郷に帰りなさい」とお命じになります（創31：13）。それはかつて神がアブラムに「家を離れ」るようお召しになったのと同じ言葉でした（同12：1）。

彼に行くべき時であることを促したのは、ラバンの息子たちとラバンの態度でした（創31：1、2参照）。「ヤコブは、エサウに会う恐れさえなければ、とっくの昔に、この悪賢い親類のもとを去っていたことであろう。ところがヤコブは、ラバンのむすこたちが、彼の富を自分たちのものだと考えて、暴力に訴えてでも手に入れようとする危険を感じた」（『希望への光』95ページ、『人類のあけぼの』上巻210ページ）のでした。

こうして、彼は家族を連れ、財産と共に出発します。そしてここから、神の契約の民の新たな章が始まるのでした。

神がヤコブを選ばれたのは、彼が選ばれるに値する者であったからではなく、神の恵みのゆえでした。そうすること自体が矛盾であったにもかかわらず、ヤコブは恵みを受けるに値する者であろうと懸命に努力します。もし彼が受けるに値する者であったなら、それはもはや「恵み」ではなく、福音とは対照的なところにある「行い」なのです（ロマ4:1～5参照）。後になって、ヤコブはようやく神の恵みの意味、そして神に信頼すること、信仰によって生きること、そして主に完全に頼り切ることとは何を意味するかを理解します。ヤコブの経験は、野心的な者にとっては重要な教訓です。すなわち、他者を犠牲にして自分を高めようとすることへの戒めと言えるでしょう。

「ヤコブは欺きによって長子の特権を手に入れようとした。しかしそれは自分を失望させることになった。彼は神との関係、家庭の絆、そしてあらゆる交わりを失い、まさにすべてを失ったと考えた。そこには失望した逃亡者となり果てた彼がいた。しかし神は彼を見過ごされなかった。主は絶望的な状態にある彼に目を留め、彼の失望をご覧になり、そして主は彼の内に、神に栄光を帰すことのできるものを認められた。主は彼の状態をご覧になるやいなや、キリストを指し示す不思議なはしごを彼に見せられた。ここに神とのすべての関係を失った人間がいる。そして天の神が彼に目を留め、キリストを通して、罪の深淵に橋を架けることを承認される。人は天を見上げて言うだろう。私は天を思いこがれるが、どうして届くことができるだろうと。それがヤコブであった。だからこそ、神は彼にはしごの幻を見せたのである。そしてそのはしごは、イエス・キリストによって天と地をつなぐ架け橋なのである。その根元は地につながり、その先端は天に届いているはしごを、私たちは登ることができるのである」（『SDA聖書注解』第1巻1095ページ、英文）。

話し合いのための質問

- ① 聖なる歴史に名を残した者たちをも含むこれらの人々（イサク、リベカ、ヤコブ、エサウ、ラバン、ラケル、レア）の性格について考えてみてください。彼らを巻き込んだ嘘と欺きに注目してください。それらは一般論としての人間の性質と神の恵みについて何を教えているのでしょうか。
- ② ヤコブの物語を読むとき、彼の品性が時間をかけて成熟し、成長したことを示すどんな証拠を見ることができますか。
- ③ 私たちは、セブンスデー・アドベンチストとして、長子の特権に対するエサウの態度に見られるような危険に陥ることがないでしょうか。私たちはどうすれば、神から与えられているすべての光を愛し続け、味わい続け、感謝し続けることができるでしょうか。

私の最も貴い所有物

ナミビアから南アフリカへ向かう飛行機の中で、いつものように聖書を開きました。突然、隣の若者が、「それは聖書ですか？」と尋ねてきました。東ヨーロッパの人でした。「ええ、聖書ですよ」と答えると、「聖書を信じているのですか？」とさらに尋ねてきたので、「はい、心から」と、私は答えました。

彼は、祖父母から聖書を読んで聞かされたものの、天地創造信じられなかったと言いました。そこで私は、15年間孤独に生きてきたものの、主が人生を変えてくださった経験を話しました。私の話に興味を持った彼は、「あなたの聖書を持ってもいいですか？」と尋ねました。彼の手にある自分の聖書を見るとワクワクしました。彼に大きな印象を与えていると思ったからです。手元に戻ってきた聖書のイザヤ書43章を朗読すると、彼は神様の守りの約束に耳を傾けました。

着陸前、私は、「贈り物を受け取っていただけますか？」と尋ねました。バッグの中に『キリストへの道』を持っていたのです。彼は遠慮しましたが、もう1冊持っているから大丈夫だと言い、「もし質問があったら、ショートメールをください」と表紙の裏に電話番号を書きました。

驚いたことに、数日も経たないうちに、「無事、帰宅しました」というメッセージが私に届きました。「主よ、これは偶然ではありません」と祈りました。彼は、毎日祈っている女性にナミビアで出会っていたことを教えてくれました。「それを考えていたら、祖父母が聖書を読んでいたことを思い出したのです。そして、あなたに会いました」と、彼は書いてきました。「私は偶然を信じません。神様があなたの心に語りかけてくださいますように」と返信を送りました。

それからメールのやり取りが始まり、私は聖句を添えるようにしました。ある日、「教会の隣に住んでいます」と、教会の写真が届きました。そこで、キリスト教会の歴史書を送りたいと返事すると、住所を教えてくれたので、『各時代の犬争闘』を送りました。また、ある人からいただいた救いの計画についてのビデオもプレゼントしました。彼は「本当にすごいですね」と返事をくれました。「主よ、何が彼の人生に影響を与えるのでしょうか」と祈ったとき、「飛行機の中で、彼が手にしたあなたの聖書を彼に与えなさい」という強い思いが生じてきました。

私は自分の聖書を送る決心をし、「私が持っている最も貴いものです。神様は、私たちを救うために、ご自分にとって最も貴い御子を与えてくださいました。あなたが、私にとって最も貴いこの聖書を読んでくださいますように」と書き添えました。

(シーダ・ピエナール)

